

春秋戦国時代

■ 春秋と戦国

春秋戦国時代は大きな変革を経験した時代である。春秋時代には140余国が存在したとも言われるが、『春秋左氏伝』記載の国の数、戦国時代には七雄と呼ばれる7大国に集約され、最終的に秦によって統一された。このことから春秋戦国の社会変動の激しさを見てとれる。

春秋時代という名称は魯の国の年代記である『春秋』に由来する。戦国時代は前漢末に故事を集成した『戦国策』に基づく。春秋時代は東周平王の即位する紀元前770年を開始とし、戦国時代は春秋晋国の有力世族である韓・魏・趙(三晋)が前453年に晋を三分した三家分晋をもって戦国時代の始期とする考えが有力である。戦国は以降前221年の秦統一まで続く。なお、春秋戦国時代は東周時代と称する場合もある。

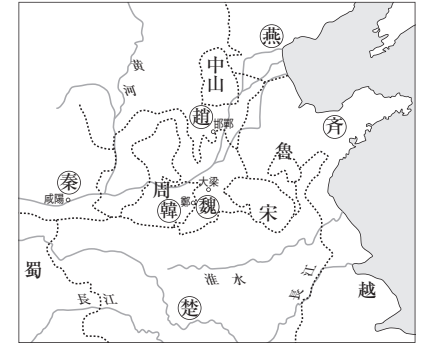
■ 春秋時代

春秋時代には周王の権威が弱まり、封建諸侯が力を伸ばした。代表的な諸侯は春秋の五覇と呼ばれ、斉の桓公・宋の襄公・晋の文公・秦の穆公・楚の荘王とする説と、宋・秦に代えて呉王夫差と越王勾践を加える説もある。覇者は名目上盟誓を通じて周王をあがめ扶助する立場を示したが、南方諸国が王を称したように、周王にたてつく諸侯も現れた。

春秋時代の各国の内部には諸侯の下に卿・大夫・士という階層があり、当初はその秩序は厳格であった。墓の副葬品にも階層ごとに個数や種類に制限があった。春秋時代までは一族の血縁的なつながりを強く維持し、宗主のもと団結して行動した。諸侯国の中で代々政務を担った一族を世族と呼び、ほかに城内部に居住し一定の政治的な権利を持った人々を国人と呼んだ。春秋時代の中後期になると諸侯国の中では上下の秩序が乱れ、世族内部でも統制のきかない事件が起こるようになる。下克上と呼ばれる事例が各国で起こり、諸侯を殺害し、国をのっとる者も現れた。前述の三家分晋はその最たる例であり、東方の大国斉でも他国から入った



河北省邯鄲市に位置する叢台公園。胡服騎射で知られる趙の武靈王の時に初めて建造されたと伝えられる。



戦国七雄の領域(前4世紀半ば)

田氏が国君を暗殺して後に諸侯に列せられた。

■ 戦国時代

戦国初期に勢力を伸ばしたのは魏である。魏の文侯は有能な人材を登用し、国内の改革を進めた。しかし魏は前4世紀半ばに斉との桂陵の戦い、馬陵の戦いに相次いで敗れ、さらなる発展を挫かれた。西方の秦は孝公の時、商鞅を登用し、2度にわたる変法によって国内制度を改革した。その内容は多岐にわたり農業、税制、軍事、地方行政のほか、村落秩序や家族組織にも及ぶ。戦国時代は数万・数十万単位の戦争が起こるようになり、各国は富国強兵に努めた。この時代、郡県制という地方統治の仕組みが整備され、その官府には君主の手足となる官吏が配置された。

戦国後期には合従連衡と称される秦と対抗する国家連合と秦と協力する連合が対立し、蘇秦や張儀などの人物(縦横家)が活躍した。同じ頃戦国四君と呼ばれる斉の孟嘗君、趙の平原君、魏の信陵君、楚の春申君は多くの食客を集め、名を轟かせた。特に後三者は秦の統一を決定づける長平の戦いの後にも合従を成立させ、秦からの攻勢を防いだ。

戦国時代には鉄器と牛耕が広がり、農業生産が発展した。また青銅器も春秋時代の礼器から実用的な器物に変わった。青銅貨幣が大量に発行され、金とともに流通した。貨幣は武器や農具など多様な形をとったが、最終的に円形の秦の半両銭に統一された。こうした背景のもと中原では都市が発展し、かつての血縁的なまとまりも崩れていった。[下田誠]